参勤交代九州路完歩

澁谷　繁樹

二〇一六年四月九日の夕、北九州の小倉城で散り急ぐ桜を目で追いながら、赤葡萄酒を紙コップで呑んだ。酌み交わす相手は三十三人。ちょうど十年前の〇六年四月二日、雨が降りしきる鹿児島市の西田橋を出発、参勤交代の出水路をできるだけ当時の道に沿いながら歩いてきた。船に乗り込む門司までの僅かな距離は残しているものの、実質、九州路は踏破したなと次第に回る酔いに揺られながら、誰彼と無く「やりましたね」と握手して回った。

出水までの一一三キロは九回に分けて一年ちょっとで歩き通した。歩きを主催する薩摩街道保存会は、会員の平均年齢が高く、女性も多い。けがに見舞われないよう、お手洗いでどたばたしないよう、事務局は気を遣った。毎回、傷害保険をかけたが、九州路の全行程を通じて、保険申請をせずに済んだ。すこうし足下が怪しくなってきた新聞記者が、熊本路でくるぶしの捻挫に見舞われたくらいだった。

本人からしたら完治に半年もかかったけっこう重い挫きっぷりだったのに、冷や汗と痛みを負け惜しみに紛らわせ、筋肉痛の軟膏を所持していた女性会員が手ずから「うちのダンナにもしたことないんだけど」と塗り込んでくれたのを幸い、人妻の指忘れないふくらはぎ、と戯れ唄に仕立て上げ、長老会員の一人から、ウンさすがに男の子である、と賛辞を頂くおまけまでついた。

薩摩路を終えた段階で、さて次は、となっ

た。一区切りの酒宴つきの事務局検討会議だったし、江戸まで一五〇〇キロ、完歩は夢ではないとの新聞コラムをぶちあげた新聞記者が「目指すは江戸城」とつぶやいたりしたものだから、イッチョやってみるか、と熊本に突入した。

水俣から先は、津奈木、佐敷、赤松の三太郎峠が待ち構えている。昼なお暗い国道トンネルの上にそびえる三つの峠を越えていかなければならない。薩摩路までは地元の利に加え保存会会長の事前調査も怠りなく遂行できたが、人様の領地となると勝手が違ってくる。こっちでもあっちでもそっちでもないを繰り返し、三〇キロを超える峠路を気づいたら越えていた。

馬の背を分ける夕立の中を急ぐ広重の五十三次の「庄野」、路の両端は切り通し、三太郎峠も、松の上は空、下は崖の細道が続く。こんな路を草鞋で江戸まで二ヶ月もかからずに歩き通している江戸人の健脚には、あらためて舌を巻かされた。さまようちに明治期に貫通したトンネルに迷い込んだりもした。回り道になったとはいえ、真の闇が籠もっているトンネルをおっかなびっくり抜けた経験は、いい酒の肴になっている。

藪から突如として顔を出した歩き人に、昔の路を歩きんしゃっと、そらあ、また、とコンテナいっぱいのポンカンを差し入れてくれた農家のオジサンは元気だろうか。

熊本城の桜も忘れられない。一一年は東北大震災の影響で参加できなかった新聞記者も山鹿からたどる一二年四月の熊本城入りには加わり、美桜美酒に酔いしれた。四年後の倒壊の影すらなかった城。「もう我々の生きているうちは、あの光景は拝めないなと思うと、なんともはや」との会員の言葉にうなずきな

がら、西南の役で焼き払った側の子孫だから、復興にも責任があるのかも、と負い目を感じていたりもする。

四〇〇キロを済ませて、残るは一一〇〇キロ。七月に開いた保存会総会で歩き続けるかどうか、話し合った。新聞記者も意見を求められた。「京都の花街で薩摩の江戸人はかなりもてました。借金だらけのくせに社交経費は使い放題といういい加減な政策に乗っかっていたせいもありますが、ひとつ、薩摩の平成人はどうなのか、試してみるのも一興かもしれませんわネ」。結論は続行。寿命と追っかけっこの江戸行き、とりあえずは京の都が待っている。

（元新聞記者）